

カンボジア選挙監視に参加して

光森 祥子（神戸大学大学院博士課程）

はじめに

「紛争後、10年を経たカンボジアはどのような平和再建の道歩んでいるのか」

こんな漠然とした疑問を持ってカンボジア選挙監視ミッションへ参加した私だった。

初めてのカンボジア、初めての選挙監視、約10日間という短期の活動、何が得られるのか何も検討がつかないままカンボジア入りした。しかし、その予想を裏切って選挙監視活動は私に様々な発見と、問題意識を提示してくれる機会となった。カンボジアの基礎知識が不十分なので、今回は選挙監視活動を通して私が考えたことを中心にまとめたいと思う。

1. 「民主主義」「自由」という言葉に込められた

思い

私が、選挙監視の任地として配置されたのは首都プノンペンから車で約1時間走ったところにあるコンボンスプーという Province だった。そこは、インターバンドが除隊兵士支援活動を行っている拠点地域であり、インターバンドの事務所がある。13名の監視員が配置され、大きく2つのチームに分かれて活動することとなった。私たちのチームの特徴は、なんといってもインターバンドがその地域で除隊兵士支援活動を行っていることであり、これまで築いてきた信頼関係の中で、選挙に関する意見を一般の人々から聞くチャンスが開かれているということであった。もちろん、事務所に勤務しているインターバンドのローカリストから政治的意見を聞けることも大きな財産だった。

インタビューする中で、私が感じたことはC P Pへの反感、腐敗への憤怒、そして民主主義の渴望とサム・リャンシー党への期待であった。これは特にインターバンドのスタッフや通訳であった彼らから感じたことであるので、国全体の雰囲気を反映しているとは決していえないが、ある程度の国民の思いの反映ではあると思う。

私が彼らの話を聞いている中で、まず困惑したのが、「民主主義」というものである。私は今回の選挙監視全体を通して、改めてこのこと

を考えさせられることとなった。民主主義を求める声を聞き、民主主義とは何かを自問せざるを得ず、彼らが民主主義をどう捉え、民主主義に何を求めているのか、ということが漠然と私の心に残った。私たちの通訳をしていたN a r i氏は、民主主義をこう述べていた。「民主的とは、市民社会やN G Oが数多く存在し、国際社会の情報が流通している状態」。また、「自由」という概念と一緒に述べられることが多く、「情報を与えられる自由、指導者を交代させることの出来る自由」とも言っていた。私たちがインタビューする中で、「選挙後、何を期待するか」という質問に対し、「新しい政権、新しい指導者」という答えはしばしば耳にする言葉でもあった。ただ、まだ私の中で、何故人々が民主主義を求めるのか、自由を求めるのか、わからなかった。おそらく、それは私がこれまで民主主義や自由を自ら求めた経験がないからだったと思う。何が民主主義を阻止していると感じさせるのか、自由が妨げられている、とはどのような状況なのか、それは実際に自由が拘束され、政府が民主的でないために弊害を被った人々にしか実感できない思いがあるのかもしれない、と選挙監視を始めて間もない頃感じた。

2. 見えにくい人々の投票意思決定過程 ～カ

ンボジアの現実～

そのような漠然とした思いを抱えてインタビューを進めていく中で、私に迫って見えてきた現実は、「選挙は操作される」ということである。もっと正確に述べれば、人々の投票コードは自身の意思とは別の影響力によって決定されていく過程がまだカンボジアに多く発見されるということである。それは様々な形で現れるが、一番多いのは脅迫であるように感じた。インタビューをしている時にも、ある人は周りを気にして政治的意見を述べることを躊躇するという場面が見られたり、「自由に投票できているか」という質問に対し「YES」と答えておきながら、「では周りの人の意見はどうか」と尋ねた時には、「投票の自由を脅かされている人々は多くいる」と答える。また往々にして、自分の支持する政党を明言する人は少なかったが、暗にC P Pを批判している内容ととれる話は幾つか聞きだすことが出来た。ローカルNGOであるCOMFRELから得た情報だと、1993年から2003年の間にC P Pに反発した人が殺されたという事件があったため、人々はC P Pへの反感感情を露呈することは恐れていると推測できる。

私が話を聞く中で、最も興味を抱いたことの一つは、人々の投票カードの最大の決定要因は何か、を考えることであった。様々情報を収集していく中で、脅迫は村のチーフからの圧力によるものであったり、投票の権利を示す一つであるIDカードが回収されていたり（ANFREELはこのようなことが現実に行われた証拠として回収されたIDカードを得ていた）、仏教の教えを悪用した脅迫、お金や物をあげることによる買収などが頻繁に行われたようである。またCPPによって農村地域でのインフラの整備や食料の配給が行われるなどの行為が選挙前に集中して行われるなど、常套手段も忘れられることなく実施されたようである。しかしながら、このような買収行為にカンボジアの人々は従順であったとも思えないところが興味深かった。例えば、インターバンドが除隊兵士支援をしているある家族を私たちが訪問した時、なんの躊躇いもなくCPPからもらった帽子を見せてくれた彼女がこんな言葉を言った。「CPPはお金がある政党だから人々に物を配ることが出来る。貰えるものはもらっておくが、それが私の投票の意志に影響するかといえばそれは別問題。」およそこのような内容のことを言った。60歳過ぎ位に見える彼女は、CPPが物を配ることが出来るだけのお金を持っている、つまり腐敗していることを

批判しているようにも私には聞こえた。また、明らかに C P P を嫌っている人が C P P から配られたフンセンの顔がついた時計を常時身につけていたことに疑問を抱き、彼に質問したところ「この時計は、誰が敵なのか、味方なのかかわからないような見知らぬ土地に行く時にセキュリティの役割を果たしてくれる」と述べていた。C P P をあからさまに批判すると、どんな危険があるかもしれないことはよく聞いた話である。様々なところでの現在の権力者は往々にして C P P であることが多いので、身を守るための賢い手段なのかもしれないと感心した。このような、一見 C P P を支持しているかのように見え、実は内心裏切っているという人々は少なくないようである。3 大政党（C P P, S R P, F U N）の選挙キャンペーンには多くの人々がラリーに参加して加熱した雰囲気醸し出していたが、お金をもらって、支持政党に関係なくキャンペーンに参加しているという人もいたようであった。

このような話を選挙前に聞きながら、今回の選挙はもしかして C P P の得票は少なくなり、S R P が得票を大きく伸ばすかも、と安易に考えたのは私だけだっただろうか。

結果は、私の予想を簡単に裏切り、唯一プノンペンを除いた全州で C P P は勝利した。プノンペンだけはサム・リャンシー党の圧勝で終わっていた。私が監視したコンポンスプーではサム・リャンシー党の健闘が見られたものの、全体的にはやはり C P P の勝利で幕を閉じた。何故、そのような結果に終わったのか。上記に述べたような私を感じたことは、間違いだったのか。しかし、私は上記で述べたようなことも現実、そして C P P が勝利したこと、このどちらもがまさしくカンボジアの現実を示していると思い直した。

3. 何故、C P P が勝ち続けるのか

C P P と S R P の大接戦が見られたのは、Traeng Trayuen Commune という地域でリゾート地（シアヌークビル）に続く土地の値段が将来上がることを予測して、軍人・高官が囲い込んで占領しているという問題がある地域だった。この地域に住んでいる住民は立ち退きを強制されていた。その住民の投票コードが反 C P P と出るのではないか、と予測して私たちは監視を行ったが、予想通り、C P P は苦戦を強いられ S R P との大接線となった。インタビューの中でも新しい政権にこの問題を解決して欲しいとの言葉があり、S R P への

期待はみてとれていた。しかし、現在住民は裁判所の判決を待つて

いるだけの状況で他になす術なし、といった状況のようにも見えた。

他に私たちが注意を払って監視した地域に Voasa Commune があ

る。ここは中国系の外資で成り立っている縫製工場が多くある地域

である。政府が外資を誘致するために優遇措置をとって多く工場を

建てているが、16～20 歳以下の女性が劣悪な労働条件の下で多

く働いている。S R P がその状況を指摘、C P P との対立軸を明確

にするため問題化し、労働者をストライキに駆り立たせるようしてい

る状況があったようである。しかしながら、この地域の投票結果はC

C P が圧勝しており、私たちが期待していたような結果は反映されな

かった。この理由として劣悪な労働条件の下におかれて、実際に苦し

んでいる人は、まだ投票権のない18歳以下の女性が多くを占めて

いると考えられるので、投票結果に反映されなかったとも考えられる。

しかし、現金収入の仕事に就くことが難しく、そういった意味で安定し

た職が他に少ないような状況があったとすれば、実際に外資系の会

社がなくなってしまうば、人々は生活のよりどころをなくすというのが現

実ではないだろうか。S R P が労働条件の劣悪さ、人権侵害を指

摘し、政府を批判したことは正当なことかもしれない。しかし、選挙の

得票を得るためには失敗した戦略だったと言えないだろうか。「人々

は生きていくために必要なことから選んでいく」そんなことを感じた。

開票に立ち会う中で、興味深かったのは葉無効票となった投票用

紙が意味することである。

私が監視した開票所は 1051 枚の投票用紙のうち、25 枚が無効票

となった。なかなか多い数である。無効票になったものは、2 つマーク

がつけてあるものであったり、投票用紙の裏にマークされてあるもの、

全く意味のない場所にマークされているものがほとんどであった。最

初、私はそれが意味することは、人々のリテラシー能力の不十分さか

と思っていたが、後で話を聞くと、脅迫や恐怖感を意味している

も考えられるとのことであった。つまり、村のチーフから強制されて投票

所に来ている人々や C P P に入れるように言われてきている人々な

どが、投票所に来たものの、C P P に入れることを嫌い、わざと無効

票になるようなところにマークすることも考えられるというのである。初

め、それを聞いたとき投票の秘密は守られているのだから（私が見た

場所では守られているようだった）、本当に自分が支持するところに

マークすればいいではないか、と安易に思ったのだが、宗教的力を利

用して人々をコントロールするなどのトリックを使うことも珍しくないように、それは人々に影響力を及ぼす力を持っているらしい。また、異なった側面から推測できることは、私たちがインタビューした人々の中では S R P の支持者が多かったように思ったが、（皆一様に「新しい政権、新しいリーダー」という言葉を使っていたが）本当に C P P が負けて S R P が勝ってしまうことを人々は不安に思っている、ということである。C P P にはこのまま居座ってほしくないが、C C P が負けてしまった時に国が混乱、不安的に陥るのではないかという一抹の不安はもしかして誰もが持っているのかもしれない。そのような理由で、投票所に来たものの、どこかにマークする勇気がなく、無効票になってしまったといったことも考えられるように思う。

また、実際に C P P に入れた人が多くいたことに関しては、チーフからの強制や脅迫などといった受動的な理由からだけではなく、主体的理由も考えられるかもしれない。村のチーフは、もし自分の所属する Commune で C P P が負けてしまえば、C P P から弾圧され、地域が孤立化し、国家の利益が地域に配分されないことを恐れるだろう。チーフは C P P を勝たせることによって、自らの村人への影響力とファンセンへの忠誠心を示し、権力保持に力を注ぐことになる。しかし、それ

はチーフだけに当てはまる行為ではなく、もし、そのことによって利益を得ている村人がいたとしたら、村全体が国の公共事業などを生活の糧としていたら、人々は進んでC P Pに入れるだろう。これは、脅迫や弾圧、暴力などの問題だけではなく、他の途上国政治に往々に見られるようにカンボジア全体の政治構造に起因する根深い問題のように思う。フンセンを頂点とする利益分配の構図が農村地域の隅々まで成立していたとすれば、それを崩すことは大変な難作業であり、長期政権になればなるほどその構図は確固としたものに強化されていく。これは、「民主主義」「自由」といった理念だけではなかなか崩せないものであることは確かであろう。S R Pが今回思ったほど得票を伸ばせなかったのもひとつはそこに起因するように思う。

おわりに

しかし、現在のフンセンの長期政権、腐敗に人々はもちろん満足しているわけではない。そのことは確かだろう。与党が民主的な政府へと改善されていくのを望むのか、新しい政権を望むのか、それはカンボジアの人々が決めることであるが、どちらにせよ、人々にとってより良い

状況になるために、私たちに手伝えることがあるとすれば、何だろうか。

選挙は人々の意思を確認する重要な制度であることを今回実感した。それ故に、今後も国際選挙監視員として選挙そのもの、選挙プロセスが「自由で公正なもの」であるように注意深く監視するとともに、何に人々が脅威を感じ、何が人々の自由な投票の権利を阻害しているのかということも分析することも必要だろうと思う。今回私たちは実施することはなかったが、選挙後の混乱を恐れる、というのも人々の投票コードに反映されるとすれば、選挙後混乱を防ぐために選挙後も監視を続ける、といった役割も重要なものとなるだろう。

まだ（8月16日現在）新政権の行方が見えないカンボジアを見守りたいと思う。

[▲ Page Top](#)